# 北海道木彫り熊発祥の地・八雲

## 八雲町木彫り熊資料館オープン

八雲町木彫り熊資料館は、八雲町林業研修センターから所管替えを行い、木彫り熊や関連資料を展示し、歴史を紹介しています。また、公民館の木彫り熊講座の開催場所としても活用しています。平成24年から八雲木彫り熊展示室がありましたが、新規オープンにともない、展示室の広さ・展示ケース数は約2倍になり、八雲だけでなく北海道内の木彫り熊の展示も行っています。

今回の拡充により、旭川をはじめとした道内各地の木彫り熊も展示しました。八雲の熊とはまた違う表情をその目で確かめてください。

## 木彫り熊のルーツは

木彫り熊の発祥を語るのにかかせないのが、尾張徳川家の関わりです。明治11年に第17代当主慶勝公の主導で、禄を離れた士族たちが授産のために遊楽部の地を徳川農場として開拓し始めました。次の第18代当主義礼侯のときに徳川農場の規模を拡充し、そして第19代義親侯の時代を迎えます。

義親侯は、大正7年から毎年のように徳川農場の視察に訪れるとともに、アイヌと一緒に熊狩りを行い「熊狩りの殿様」と呼ばれました。大正10～11年にヨーロッパ旅行に出かけた際に寄ったスイスにて、木彫り民芸品（ペザントアート・農村美術）が販売されているのを見て「これを冬の農閑期に八雲でやれば副収入になる」と考え、いくつか買って帰国しました。

この頃の八雲は、重要な輸出品であった八雲片栗粉（馬鈴薯でんぷん）の価格が大暴落して離農が相次ぎ、これまでの単一農業から有畜農業、ひいては酪農へと全町挙げて舵を切り始めた頃。熊狩りの際に農村の苦しい生活を実際に見ていた義親侯は「とにかく作ってみろ、できたものは私が買い上げるから」と八雲の農民たちに民芸品制作を勧めました（農村美術運動）。その作品の品評会を兼ねた即売会を、大正13年3月に八雲小学校にて開催。そこには、酪農家の伊藤政雄氏がスイスの這い熊を参考に作った北海道第1号の木彫り熊が出品されました。

小熊を抱く義親侯

北海道第１号の木彫り熊（左）
スイスの木彫り熊（右）

木彫り熊は大きいイメージがありますが、最初の木彫り熊は手のひらにのるほど小さい物でした。

その後、木彫り熊は、全国各地からの注文が増加するとともに、様々な品評会で高い評価を得ていきます。それに勢いを得て昭和3年には『八雲農民美術研究会』が徳川農場を事務局として結成され、昭和6年には「北海道観光客の一番喜ぶ土産品は八雲の木彫り熊」と全国紙に紹介されるほど有名になりました。

ちなみに、研究会では木彫り熊を商標登録しています。それを『熊彫』といい、義親侯の『熊狩』にちなんでつけたといわれています。

八雲の熊彫

北海道八雲町

八雲農民美術研究会

販売パンフレット

## 八雲の木彫り熊の特徴

八雲の木彫り熊の彫り方には2系統あり、昭和初期には既に確立しています。

1つは細密に毛を彫る「毛